

## 山陽鉄道の開通と運賃

現在のJR山陽本線の兵庫～姫路間が、山陽鉄道会社という私鉄線として、明治二十一年（一八八八）十二月に開通したことは、昨年八月号に記したとおりです。

会社設立に至る経緯は、『山陽鉄道会社創立史』という本にまとめられています。それによれば、発起人らは、既存の交通機関の輸送量や運賃を慎重に調査したうえで、鉄道敷設計画を進めていたことがよくわかります。

それをふまえ、会社側では、競合する輸送機関を意識しつつ、運賃を設定したいと願っています。この文書によれば、当時人力車の神戸～加古川間の運賃は、平均すれば二十五銭だったようです。また、それ以前の主要な輸送機関は汽船ですが、高砂～兵庫間の旅客の運賃は、上等が四十銭、中等が三十銭、下等が二十銭で、実際にはその三割引が普通でした。さらに、米一石を

高砂から兵庫へ和船で運ぶ場合は、四銭五厘ですが、これも大量に輸送する場合は割引があつたということです。

こうした実情をふまえ、当時の国鉄の基準どおりに運賃を設定すれば、鉄道が「ぜいたく品」とみなされ、利用者が見込めないというのが、会社側の言い分です。そのため、国鉄の二割減の運賃で開業したいと申し出たのです。

ちなみに、明治二十五年時点での山陽鉄道会社の運賃表によれば、加古川～神戸間の下等運賃は二十四銭、阿弥陀（現在の曾根）～神戸間は二十九銭となっています。このように、明治中期以降、鉄道が交通体系の中心的な位置を占めていく過程においては、既存の輸送機関との競合と対抗が常に考慮されていたのです。

（高砂市史編さん専門委員

松下 孝昭）